

本シンポジウムでは、分類、生理、生態から食品利用まで、コンブについて幅広い知識を得ることができました。研究職2年目の私にとって、視野を広げ、さまざまな研究シーズを得ることができ、大変有意義でした。コンブという海藻が果たす役割は多岐に渡っており、各分野の利害が必ずしも一致していることはありません。しかし、日本全体のコンブ産業の発展のためには、漁場の回復、生産の予測や増大、付加価値を高めるための育種や新たな商品開発、消費拡大など、各分野でコンブに携わる方々が一体となった取り組みが重要だとの認識を深めました。

最後に、ご講演者、写真を提供していただきました大会事務局の方々に心よりお礼申し上げます。

(青森県水産総合研究センター増養殖研究所)



シンポジウム会場

大田修平：ワークショップ参加記

日本藻類学会第28回大会のワークショップは3月30日から31日にかけて、北方生物圏フィールド科学センター室蘭臨海実験所で行なわれた。ワークショップのおもな内容は、間接蛍光抗体法による蛍光顕微鏡観察、透過型電子顕微鏡での観察および実験所周辺でのサンプリングであった。

昼ごろ、前日の札幌での学会を終えたワークショップ参加者たちは室蘭臨海実験所に集まっていた。午後2時30分ごろから、長里さんが間接蛍光抗体法の説明をしてくださった。室蘭でのワークショップは実に自由で、間接蛍光抗体法をやっている最中でも、サンプリングをやりたい人は、サンプリングをやっている、という感じで、最初から最後まで硬くならずにお過ごせた(写真1)。

今回のワークショップでは間接蛍光抗体法の実践で、とくに微小管を染めて観察する手法を習った。手法そのものも勉強になったが、一番勉強になったのは、長年培われてきた実験に対するちょっとした工夫である。たとえば、poly-L-リジンをカバーガラスに塗布するとき、(新品の)カバーガラスを徹底的に洗浄(超音波洗浄→流水すすぎ→乾熱滅菌)してから、poly-L-リジンを塗布すると、非常にうまく塗布できる、がその一例である。このようなちょっとしたコツはやはりベテランから直接習うのが一番である。今回のワークショップで役に立った情報のひとつは、poly-L-リジンを塗布したカバーガラスに微細藻を張りつけるコツである。微細藻を貼り付けるときは、細胞を含んだ培地をカバーガラスに滴下し、そのまま軽く乾かすと、しっかり張り付くらしい。また本村さんが実験の合間によく言っていたことのひとつが「材料に合わせた固定の工夫」である。電子顕微鏡にしても蛍光顕微鏡にしても、通常は細胞を固定してから観察する。その際、いかに生きた状態に近い形で固定するか(固定によるアーティファクトをできるだけ少なくするか)、が大切であり、工夫のいるところである。たとえば、グルタルアルデヒドを

使う、使わない、は用いる材料によって異なる。グルタルアルデヒドの濃度や用いるバッファーの種類、浸透圧の調整など、固定に際して工夫するべき点はいっぱいある。

今回のワークショップは基本的に1泊2日であったが、中には3日以上室蘭に滞在された方も居られた。それぞれ、得られるものも多かったと思う。今回は本村先生、長里先生をはじめ、室蘭臨海実験所スタッフの方々には大変お世話になりました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。最後にワークショップの参加者を書いておきます(順不同、敬称略)。島袋寛盛(鹿児島大学)、西原グレゴリー直希(鹿児島大学)、田中厚子(神戸大学)、関本訓士(甲南大学)、木村圭(甲南大学)、岡直宏(愛媛大学)、鈴木雅大(東邦大学)、大田修平(金沢大学)、平川泰久(金沢大学)、渡辺剛(東京学芸大学)、林愛子(金沢大学)、堀口法臣(金沢大学)、阿部真比古(三重大学)、植木千佳(北海道大学)。

(金沢大学大学院自然科学研究科)

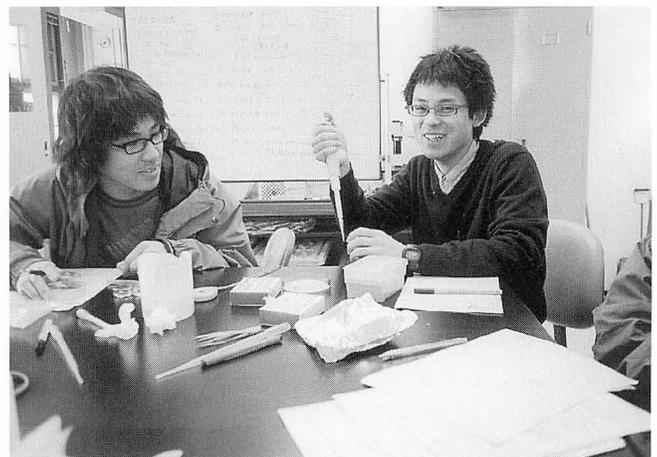


写真1. 実験風景。これから二次抗体を入れます。